

[学術論文]

幼児期気質質問紙 36 項目日本語版 (CBQ-36-J)
作成の試み

Development of the Japanese version of the 36-item Children's Behavior
Questionnaire (CBQ-36-J)

成瀬 茉里香・草薙 恵美子・星 信子・中川 敦子・鋤柄 増根
Marika NARUSE, Emiko KUSANAGI, Nobuko HOSHI,
Atsuko NAKAGAWA, Masune SUKIGARA

Studies in Humanities and Cultures

No. 35

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 35号
2021年1月
GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY
NAGOYA JAPAN
JANUARY 2021

[学術論文]

幼児期気質質問紙 36 項目日本語版 (CBQ-36-J) 作成の試み¹

Development of the Japanese version of the 36-item Children's Behavior Questionnaire (CBQ-36-J)

成瀬茉里香・草薙恵美子・星信子・中川敦子・鋤柄増根

Marika Naruse, Emiko Kusanagi, Nobuko Hoshi, Atsuko Nakagawa and Masune Sukigara

要旨 本研究の目的は、幼児期気質質問紙 36 項目日本語版 (CBQ-36-J) を作成し、日本における今後の気質研究に資することである。草薙・星 (2017) が CBQ 日本語短縮版を作成する際に調査した 3 歳から 6 歳児の 837 名のデータを二次分析した。その結果、作成した 3 つの気質次元を測定する CBQ-36-J は、十分な内的整合性があることが示された。また Nakagawa & Sukigara (2014) が IBQ-R 日本版, ECBQ 日本版, CBQ 日本語標準版を用いて調査した月齢 4 か月から 42 か月までの縦断データを二次分析し、回顧的妥当性を検討した。CBQ-36-J と IBQ-R 日本版, ECBQ 日本版で測定される 3 つの気質次元との間に高い相関が認められ、CBQ-36-J の有用性が示された。

キーワード : 気質, 幼児期気質質問紙, CBQ-36-J

問題

気質とは、ネガティブな情動性の強さや、環境刺激に対する過敏さ、順応性や反応の強さ、活動性、注意の切り替えの速さや課題への粘り強さなど、生来的な行動特徴の個人差を指す。こうした個人差について、遺伝的要因の影響が強く、環境要因によって変化することは少ないという見解が多くの研究者によって示されてきたが、Thomas, Chess, Birch, Hertzog, & Korn (1963) の 1956 年から 30 年以上にわたるニューヨーク縦断的研究 (New York Longitudinal Study : NYLS) を皮切りに、気質の発達研究が進むにつれ、気質は生得的で変化しないものではなく、経時的に遺伝や周囲の環境、多様な経験との相互作用の影響を受け、発達的な変化が起きうることが明らかになり始めた (Posner & Rothbart, 2007 無藤・近藤訳 2012)。

¹ 本研究結果は、日本心理学会第 82 回大会 (2018) で発表された。

気質が遺伝と環境の相互作用によって発達するという観点から、脳科学の知見を取り入れた気質理論を提唱したのが Rothbart である。Rothbart & Derryberry (1981) は気質を、情動や活動、注意の領域における反応性と自己制御の体質的な個人差と定義した。ここでの反応性とは、「刺激の変化に対する個人の敏感さの特性」、自己制御とは、「行動の接近、回避、抑制、注意の自己制御など、この反応性を調整するプロセス」を指し、これらは比較的永続的な生物学的構造を持ちつつも、発達過程で経験される環境要因によっても影響を受けると考えられている (Rothbart & Derryberry, 1981)。気質の個人差は社会的行動 (Rothbart, Ahadi, & Hershey, 1994) や、その後の学業成績 (Rudasill, Gallagher, & White, 2010) など、のちの人生に広く影響を及ぼすことが明らかになっており、気質の発達の変化を詳細に検討することは、人格形成の過程を明らかにする点においても重要な意義があると言える。

Rothbart らは上述の気質理論を実証的に検討するために、乳児から成人に至るまで年齢に応じて気質を測定できる一連の質問紙を開発してきた。月齢3か月から12か月児を測定対象とした乳児期気質質問紙 (Infant Behavior Questionnaire-Revised: IBQ-R; Gartstein & Rothbart, 2003)、月齢18か月から36か月児を測定対象とした乳幼児期気質質問紙 (Early Childhood Behavior Questionnaire: ECBQ; Putnam, Gartstein, & Rothbart, 2006)、3歳から7歳児を測定対象とした幼児期気質質問紙 (Children's Behavior Questionnaire: CBQ; Rothbart, Ahadi, Hershey, & Fisher, 2001) などである。これらの質問紙は発達段階に応じて、15前後の気質下位尺度を測定するように作成されている。例えば195項目からなるCBQは、15の気質下位尺度、活動水準 (Activity Level: ACT)、強い刺激への快 (High-intensity Pleasure: HIP)、衝動性 (Impulsivity: IMP)、内気さ (Shyness: SHY)、怒り・欲求不満 (Angry: ANG)、不快 (Discomfort: DIS)、反応の低減及びなだまりやすさ (Falling Reactivity and Soothability: FAL)、恐れ (Fear: FEA)、悲しさ (Sadness: SAD)、集中力 (Attention Focusing: ATF)、抑制的制御 (Inhibitory Control: INH)、弱い刺激への快 (Low-intensity Pleasure: LIP)、知覚的敏感性 (Perceptual Sensitivity: SEN)、接近 (Approach/Positive Anticipation: APR)、微笑と笑い (Smiling and Laughter: SMI) を測定する (表1)。気質下位尺度は、それぞれ5~13の質問項目で構成されている。これらの質問紙は、世界各地で翻訳され多くの気質研究に用いられており、日本も例外ではない (中川・鋤柄, 2005; Sukigara, Nakagawa, & Mizuno, 2015; Kusanagi, 1993; 中川・木村・鋤柄, 2009; 中川・木村・鋤柄・水野, 2011; 草薙・星, 2017)。

Rothbart & Bates (2006) は、気質には上述の質問紙で直接測定されるような気質下位尺度だけでなく、それらを包括するような高次の気質次元が乳児期から連続して存在することを明らかにしている。それが外向性・高潮性 (Surgency: SUR)、否定的情動性 (Negative Affectivity: NEA)、エフォートフル・コントロール (Effortful Control: EFC) である。米国では幼児の気質研究への関心の高まりから、この3つの気質次元の簡便な測定を可能にする、36項目からなるCBQ-very short form (CBQ-VSF) が作成されている (Putnam & Rothbart, 2006)。近年発達支援において、乳幼児の発達特性や気質といった児側の要因への配慮が求められていることから (国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター, 2018)、日本でも今後さらに気質研究への関心の高まりが予想され

る。そこで本研究では、草薙・星 (2017) の調査結果を二次分析し、幼児期の 3 つの気質次元を簡便に測定できる幼児期気質質問紙 36 項目日本語版 (CBQ-36-J) を作成することを第 1 の目的とする。作成した CBQ-36-J については、各気質次元における信頼性を検討し、性差や 3 歳から 6 歳間における年齢差について、CBQ 日本語標準版と同様の結果が得られるかについても検討する。さらに本研究の第 2 の目的は、CBQ-36-J の回顧的妥当性について検討することである。上述の通り、3 つの気質次元は乳児期から縦断的連続性を持つものである。CBQ-36-J においても、CBQ 日本語標準版と同様に回顧的妥当性を示すかを検討するために、Nakagawa & Sukigara (2014) の乳児期からの縦断データを二次分析し、CBQ-36-J 及び CBQ 日本語標準版と IBQ-R 日本版 (中川・鋤柄, 2005) 及び ECBQ 日本版 (Sukigara, Nakagawa, & Mizuno, 2015) との関連をそれぞれ比較検討する。

研究 1

研究 1 では、3 歳から 7 歳における情動、活動、注意の反応性と自己制御の個人差を測定するために米国で作成された CBQ について、3 つの気質次元を簡便に測定可能にすることを目指して作成された CBQ-VSF (Putnam & Rothbart, 2006) を参考に、日本国内で適用可能な CBQ-36-J の作成を試みる。この際、草薙・星 (2017) で収集したデータを使用し二次分析を行う。各気質次元は複数の気質下位尺度から構成されているため、CBQ-36-J においても 195 項目の CBQ 日本語標準版や 92 項目の CBQ 日本語短縮版と同様、それぞれの気質下位尺度を反映させることを留意して項目を選定する。

方法

データセット 草薙・星 (2017) で収集されたデータを利用した。これは、日本全国 5 地域 (山口県、奈良県、山梨県、札幌市及びその近郊、北海道中空知地区) の幼稚園、保育所 (合計 21 園) を通じて保護者に調査票を配布、回収し得られた、計 942 名 (園毎の回収率の平均は 67.8%, 全配布回収率は 63.9%) のデータのうち、配布方法に偏りが見られた園から回収されたもの、回答に不備のあったもの (1 名は兄弟、7 名は 25% 以上が欠損値に当たる回答) を除いた 3 歳から 6 歳児の 837 名 (男児 : 430, 女児 : 400, 不明 : 7) を分析対象としたデータであった。なお、3 歳は 178 名 (男児 : 86, 女児 : 92), 4 歳は 297 名 (男児 : 161, 女児 : 136), 5 歳は 295 名 (男児 : 152, 女児 : 143), 6 歳は 60 名 (男児 : 31, 女児 : 29) であった。調査時期は 2012 年 5 月から 12 月であった。質問項目には CBQ 日本語標準版 (Kusanagi, 1993) が用いられた。これは 195 項目からなる保護者回答形式の質問紙であり、3 つの気質次元得点および 15 つの気質下位尺度得点を算出することが出来る。指示は、「6 か月以内のお子さんの様子として ‘あてはまるか’、あるいは ‘あてはまらないか’ を考えてください。各項目に書いてあることがあなたのお子さんにどのくらいあてはまるかを次の数字をマルで囲んでお答えください。もし項目に書いてあるようなことがないためにこたえられない場合は X をマルで囲んでください。」であり、7 段階尺度 (1. 全くあてはまらない 2. ほとんどあてはまらない 3. どちらかというにあてはまらない 4. どちらともいえない

い(半々) 5. どちらかというにあてはまる 6. ほとんどその通り(あてはまる) 7. 全くその通り(あてはまる))で評定を求めたものであった。

CBQ-36-Jの作成手順 Putnam & Rothbart (2006)におけるCBQ-VSFは、以下の手順によって作成された。(1) CBQ-VSFの36項目は、CBQ-short form (CBQ-SF)の94項目の中から選択された。(2) 気質次元はそれぞれ12項目で構成されるようにし、その際各気質次元に含まれる気質下位尺度から2, 3項目ずつ選択するようにした(例えば、NEAには、ANG, DIS, FAL, FEA, SADが含まれるため、これらの気質下位尺度から2, 3項目ずつ選択する)。(3) このとき選択された項目は、各気質次元の因子負荷量が大きく、他の気質次元との因子負荷量が小さくなるものであった。上記のように、Putnamらの手順ではCBQ-SFから項目を選択しているが、CBQ-SFとCBQ日本語短縮版とは使用されている項目がすべて一致しているわけではない。CBQ-36-Jでは、3つの気質次元を測定することが目的であるため、各気質次元を構成する気質下位尺度の内容を幅広く反映し、かつ、それぞれの気質次元をよりよく構成する項目を選定する必要があると考えた。よって、CBQ-36-Jの作成手順は、(1)をCBQ日本語短縮版からでなく、CBQ日本語標準版から選択することに変更し、(2), (3)はPutnam & Rothbart (2006)の手順になった。

結果

CBQ-36-Jの作成 SURは52項目、NEAは62項目、EFCは47項目が含まれており、まず気質次元ごとに1因子を指定した探索的因子分析を行った。分析の結果、各気質次元に含まれるそれぞれの気質下位尺度から因子負荷量の高い3項目を選択したSUR 12項目、NEA 15項目、EFC 12項目の計39項目を暫定のCBQ-36-Jとした。ただし3項目の中に、例えばFEAに含まれる「暗闇を恐らない。(70R)」と「暗闇を恐がる。(130)」(「」の数字はCBQ日本語標準版の項目番号)のように、類似した内容を表す項目については、因子負荷量の高い一方の項目のみ選択し、他方の項目は、次に因子負荷量の高い項目に入れ替えた。なお、NEAのみ選択した項目数が異なるのは、この気質次元に含まれる気質下位尺度の数がSUR, EFCより1つ多いためである。次に、39項目からなる暫定のCBQ-36-Jに対し3因子を指定し、探索的因子分析(主因子法・直接オブリミン回転)を行い、3因子解を得た。3因子はそれぞれ、SUR, EFC各12項目、NEA 15項目を表すものであった。しかし、例えばSURに含まれる項目でEFCなど別の気質次元への因子負荷量も同様に高い項目(つまり両者に同程度の因子負荷量を示す項目)については、その項目と同じ気質下位尺度の別の項目に入れ替えた。この時1因子指定の探索的因子分析の結果を参考に、気質下位尺度内で既に選択した項目の次に因子負荷量が高い項目から順に入れ替えを行った。再度3因子を指定して探索的因子分析を行い、上述した3因子解が得られ、かつそれぞれの項目が別の気質次元への因子負荷量が低くなることを確認した。最後に、Putnam & Rothbart (2006)に従い、各気質次元の項目が同数となるよう、NEAから3項目を削除した。この時、NEAに含まれるすべての気質下位尺度の項目が2項目以上選択されるよう注意しつつ、NEAへの因子負荷量が低かった3項目を削除した。その結果、DIS, FAL, FEAの気質下位尺度から、それぞれ1項目が選択され削除されることとなった。残った36項目に対し再度、3因子を指定して探索的因子分析(主因子法・直

接オブリミン回転)を行った。分析の結果、3 因子解 (SUR, NEA, EFC 各 12 項目) が得られた (表 2)。以上の手順で選択された 36 項目をもって CBQ-36-J とした。

尺度の信頼性 各気質次元について、本サンプルで得られた CBQ-36-J の信頼性係数 (α)、Putnam & Rothbart (2006) の CBQ-VSF の信頼性係数を算出したところ、前者では SUR, NEA, EFC の順に $\alpha = .87, .76, .76$ となり、後者は、 $\alpha = .76, .71, .71$ となった。また、米国のサンプルにおける Putnam & Rothbart (2006) の CBQ-VSF の信頼性係数は順に、 $\alpha = .75, .72, .74$ であり、本サンプルにおける Putnam & Rothbart (2006) の CBQ-VSF の信頼性係数と同程度だった (表 3)。さらに、CBQ-36-J と CBQ 日本語標準版の各気質次元における相関係数は、SUR, NEA, EFC の順に $r = .94, .87, .89$ ($p < .001$) と高かった。

年齢及び性差 年齢 (3 years olds · 4 years olds · 5/6 years olds) × 性差 (男児 · 女児) を独立変数、CBQ-36-J で算出される各気質次元得点を従属変数にした 2 元配置分散分析を行った。なお、5 歳児は相対的に人数が少ないため、5 歳児と 6 歳児を合わせて 1 つのグループとして扱った。気質次元毎における年齢及び性別ごとの平均 (*Mean*) と標準偏差 (*SD*) を表 4 に示す。分析の結果、表 5.1-5.3 に示すように SUR は性別で、EFC は性別と年齢で主効果が見られた (順に、 $F(1, 824) = 14.91, p < .001$; $F(1, 824) = 31.53, p < .001$; $F(2, 824) = 5.07, p < .01$)。性差では、SUR は女児より男児が高く、EFC は男児より女児が高かった。年齢では EFC は 3 歳児より 5, 6 歳児の得点が高いという結果が得られた。なお、いずれの気質次元においても交互作用は見られなかった。

CBQ-36-J と CBQ-VSF の項目の比較 CBQ-36-J の項目数は 36 で、CBQ 日本語短縮版と異なり、Putnam らと同数にした。この中で、Putnam & Rothbart (2006) の CBQ-VSF と重複している項目数は 10 項目 (27.78%) であった。気質次元別にみると、SUR は 5 項目 (ACT : 2 項目, HIP : 1 項目, IMP : 2 項目, SHY : 0 項目), NEA は 3 項目 (ANG : 1 項目, DIS : 1 項目, FAL : 1 項目, FEA : 0 項目, SAD : 0 項目), EFC は 2 項目 (ATF : 1 項目, INH : 0 項目, LIP : 0 項目, SEN : 1 項目) が重複していた。また、CBQ 日本語短縮版と重複している項目数は 22 項目 (61.12%) であった。なお、本稿において詳細な記載はしなかったが、Putnam らの手順に準じて CBQ 日本語短縮版から項目を選定した場合、CBQ-VSF と重複している項目数は 15 項目 (41.67%) となった。

考察

研究 1 では CBQ-36-J の作成を試みて因子分析を行った結果、3 つの因子が抽出され、各々を SUR, NEA, EFC と命名した。作成した CBQ-36-J は、Putnam らの CBQ-VSF と同様、各々の気質次元に含まれる気質下位尺度を反映した項目によって構成された。信頼性については、CBQ-VSF と項目が完全に一致しているわけではないため、参考として両者の信頼性係数を比較した結果、CBQ-36-J は CBQ-VSF よりも高く、十分な内的整合性があるといつてよいと考えた。このことから、日本ではより高い信頼性を持つ道具を使うという観点からは、CBQ-36-J を使用することが望ましいと言える。

また CBQ-36-J における性差及び年齢差についての検討を行い、SUR 及び EFC における性差や年齢差が明らかになった。Kusanagi, Hoshi, & Chen (1999) は CBQ 日本語標準版を用いて 3 歳から

6歳の幼児における3つの気質次元の性差と年齢差について検討しており、男児でSUR、女児でEFCが高くなること、EFCは加齢に伴って増大することを示している。草薙他(2014)はこうした結果を受け、従来生物学的基盤を持つため変化しづらいと考えられてきた気質も時代変化が生じうる可能性について指摘している。研究1で得られた結果は、Kusanagi et al. (1999)の結果を再現するものであり、CBQ-36-JはCBQ日本語標準版と同様に、草薙他(2014)の指摘を裏付ける結果を得ることが可能であることが示された。

研究2

研究1で作成されたCBQ-36-Jは、CBQ日本語標準版と同様に回顧的妥当性を示すかを検討するために、月齢4か月から42か月の乳幼児を対象に、IBQ-R日本版、ECBQ日本版、CBQ日本語標準版の3つの質問紙を用いて行われた、Nakagawa & Sukigara (2014)で収集した縦断調査の結果を使用し、二次分析を行った。

方法

データセット Nakagawa & Sukigara (2014)で収集されたデータを利用した。これは、名古屋市の3か月健診、H病院、Nクリニックの外来で研究協力者を募り、月齢4か月から42か月までの計6回縦断研究に参加した171名(男児:90, 女児:81)を分析対象としたデータであった。調査時期は2010年8月から2013年12月であった。質問項目には、乳幼児における各月齢の3つの気質次元を測定するために、以下の質問紙が用いられた。いずれも保護者回答形式の質問紙で、具体的状況での子どもの様子について7段階尺度(1. 全くあてはまらない から 7. 全くその通り)で評定を求めた。

1. 月齢4, 8, 12か月時には、乳児の行動チェックリスト(IBQ-R)日本版(中川・鋤柄, 2005)を用いた。191項目からなり、3つの気質次元得点および14つの気質下位尺度得点を算出することが出来る。IBQ-Rにおける3つの気質次元は、高潮性・外向性(Surgency/Extraversion)、負の情動性(Negative/Affectivity)、定位・統制(Orienting/Regulation)であり、これらはそれぞれCBQのSUR, NEA, EFCに相当する。

2. 月齢18, 24か月時には、乳幼児の行動チェックリスト(ECBQ)日本版(Sukigara et al., 2015)を用いた。201項目からなり、3つの気質次元得点および18つの気質下位尺度得点を算出することが出来る。

3. 月齢42か月時には、幼児期気質質問紙(CBQ)日本語標準版(Kusanagi, 1993)を用いた。

結果

3つの気質次元得点に関して、CBQ-36-Jから求めた月齢42か月時点の得点と、IBQ-R日本版における月齢4, 8, 12か月時点の得点、ECBQ日本版における月齢18, 24か月時点の得点との相関を求めた。その結果、月齢42か月時点でCBQ-36-Jで測定される3つの気質次元は、IBQ-R日本版、ECBQ日本版で測定した全月齢の同気質次元との間に相関が認められた。これは、CBQ-36-J

に代わって CBQ 日本語標準版を用いて相関分析を行った場合の結果とほぼ一致していた (表 5)。また、上記で求めた CBQ-36-J と IBQ-R 日本版, ECBQ 日本版との相関, 及び CBQ 日本語標準版と IBQ-R 日本版, ECBQ 日本版との相関に差があるか比較検討するために、相関係数の差の検定を行った。その結果、全月齢における 3 つの気質次元において、両者の相関係数に有意差は認められなかった。

考察

研究 2 では、Nakagawa & Sukigara (2014) の乳幼児期の縦断データを用いて、回顧的に CBQ-36-J における 3 つの気質次元の相関 (回顧的妥当性) を検討した。その結果、CBQ-36-J は全ての月齢の同気質次元との間に概ね高い相関関係を示し、CBQ 日本語標準版を用いて同様の検討を行った結果と比較しても、差は認められなかった。Putnam, Rothbart, & Gartstein (2008) は 3 つの気質次元について、IBQ-R, ECBQ, CBQ を用いて、縦断的連続性について検討しており、各気質次元における CBQ と IBQ-R 及び ECBQ の相関係数は、SUR でそれぞれ $r = .25$ ($p < .01$), $r = .59$ ($p < .01$), NEA で $r = .36$ ($p < .01$), $r = .49$ ($p < .01$), EF で $r = .05$ ($p > .10$), $r = .58$ ($p < .01$) と、同気質次元における有意な相関が 1 つを除きすべてで認められたことを報告している。また月齢が近接するにつれ、同気質次元間の相関が高くなることも確認されている。研究 2 で得られた結果は、こうした Putnam et al. (2008) の結果を再現するものであり、CBQ-36-J は 3 つ気質次元を測定する際、CBQ 日本語標準版と同程度の回顧的妥当性が示されたと考えられる。以上から、CBQ-36-J は 3 つの気質次元の測定における有用性が示されたとと言えるだろう。

総合考察

本研究では、米国内で用途に合わせ幼児期の気質を測定するために CBQ の 195 項目の標準版, 94 項目の short form, 36 項目の very short form が作成される中で、日本国内ではいまだ着手されていなかった 36 項目 very short form の日本語版の作成を試みた。その結果、各々 12 項目からなる 3 つの気質次元, SUR, NEA, EFC を測定する質問紙 CBQ-36-J を作成し、十分な内的整合性が認められた。また研究 1 では、CBQ 日本語標準版で確認された気質次元の性差及び年齢差の測定が可能であることが明らかになった。さらに研究 2 では、Rothbart らの気質理論に基づいた気質を年齢に応じて測定できる IBQ-R 日本版及び ECBQ 日本版を用いて、回顧的に CBQ-36-J における 3 つの気質次元の相関 (回顧的妥当性) を検討するために、月齢 4 か月から 42 か月の乳幼児の縦断データを用いて検討したところ、CBQ-36-J は CBQ 日本語標準版と同程度、3 つ気質次元の縦断的連続性を示し、回顧的妥当性が確認された。

しかし、作成された CBQ-36-J で使用されている項目は、米国の CBQ-VSF と 7 割近く異なっていた。これまで日本で作成された気質質問紙の日本語短縮版は、いずれも IBQ-R 日本語短縮版で 53%, ECBQ 日本語短縮版 60.7%, CBQ 日本語短縮版 91.3%と米国のものと必ずしも項目が一致しているわけではない (中川他, 2009; 中川他, 2011; 草薙・星, 2017)。そのため、CBQ 日本語短縮版

よりさらに項目を絞った CBQ-36-J において、項目の選定が大きく異なるのは必然と言える。これは特に NEA の項目で顕著に見られた。3つの気質次元内の項目をすべて12項目に設定したことに伴い、気質下位尺度が他より多い NEA において、3つの気質下位尺度を2項目で構成することが求められた。Putnam らの CBQ-VSF では、ANG, FAL, FEA が2項目となったが、本質問紙では DIS, FAL, FEA と若干の違いが生じたことが要因として挙げられる。しかし、上述の理由以外にも日米間で項目の選定が大きく異なった点については今後検討の余地が残されたと言え、現状では、日米間で3つの気質次元を比較する際には、CBQ 日本語短縮版及び CBQ 日本語標準版を使用することが望ましいと言えるだろう。

本研究では、国内の研究で幼児期における3つの気質次元 SUR, NEA, EFC を簡便に測定したい場合に用いられる有効なツール、CBQ-36-J を開発した。今後は本質問紙の有用性をさらに検討するために、CBQ 日本語標準版における3つの気質次元と他の指標との間で見られた関係性や、Putnam らの CBQ-VSF と別指標間で見られた関係性について、CBQ-36-J を用いて検討していくことが望まれる。

引用文献

- Gartstein, M. A., & Rothbart, M. K. (2003). Studying infant temperament via the Revised Infant Behavior Questionnaire. *Infant Behavior and Development, 26*, 64-86.
- 国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター (2018). かかりつけ医等発達障害対応力向上研修テキスト Retrieved from https://www.ncnp.go.jp/nimh/pdf/H29_dd_1.pdf (2020年12月18日)
- Kusanagi, E. (1993). A psychometric examination of the Children's Behavior Questionnaire. *Annual Report of the Research and Clinical Center for Child Development, 15*, 25-33.
- Kusanagi, E., Hoshi, N., & Chen, S. J. (1999). Structure, developmental change, and sex differences in temperament of Japanese children. *Research and Clinical Center for Child Development Annual Report, 21*, 17-26.
- 草薙 恵美子・星 信子・陳 省仁・安達 真由美・高村 仁知・大石 正 (2014). 子どもの気質発達についての学際的研究—予備調査をふまえて— 國學院大學北海道短期大学部紀要, *31*, 11-27.
- 草薙 恵美子・星 信子 (2017). 幼児用気質質問紙日本語短縮版の改訂 國學院大學北海道短期大学部紀要, *34*, 39-53.
- 中川 敦子・鋤柄 増根 (2005). 乳児の行動解釈における文化差は IBQ-R 日本版にどのように反映されるか 教育心理学研究, *53*, 491-503.
- 中川 敦子・木村 由佳・鋤柄 増根 (2009). 乳児の行動のチェックリスト (IBQ-R) 短縮版の作成 名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究, *12*, 15-25.
- 中川 敦子・木村 由佳・鋤柄 増根・水野 里恵 (2011). 乳幼児の行動のチェックリスト (ECBQ) 短縮版の作成 名古屋市立大学大学院人間文化研究科人間文化研究, *16*, 1-15.

- Nakagawa, A., & Sukigara, M. (2014). The Effects of Soothing Techniques and Rough-and-Tumble Play on the Early Development of Temperament: A Longitudinal Study of Infants. *Child Development Research*, 1-10.
- Posner, M. I., & Rothbart, M. K. (2007). *Educating the Human Brain*. Washington, D. C.: American Psychological Association.
- (マイケル, I. ポズナー・メアリー, K. ロズバート 無藤隆・近藤隆文 (監訳) (2012). 脳を教育する 青灯社)
- Putnam, S. P., Gartstein, M. A., & Rothbart, M. K. (2006). Measurement of fine-grained aspects of toddler temperament: The Early Childhood Behavior Questionnaire. *Infant Behavior and Development*, 29, 386-401.
- Putnam, S. P., & Rothbart, M. K. (2006). Development of short and very short forms of the Children's Behavior Questionnaire. *Journal of Personality Assessment*, 87, 102-112.
- Putnam, S. P., Rothbart, M. K., & Gartstein, M. A. (2008). Homotypic and heterotypic continuity of fine-grained temperament during infancy, toddlerhood, and early childhood. *Infant and Child Development*, 17, 387-405.
- Rothbart, M. K., Ahadi, S. A., & Hershey, K. L. (1994). Temperament and social behavior in childhood. *Merrill-Palmer Quarterly*, 40, 21-39.
- Rothbart M. K., & Derryberry D. (1981). Development of individual differences in temperament. In: Lamb, ME. & Brown, AL. (Eds.), *Advances in developmental psychology*. (Vol. 1, pp. 37-86). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Rothbart, M. K., Ahadi, S. A., Hershey, K. L., & Fisher, P. (2001). Investigations of temperament at 3-7 years: The Children's Behavior Questionnaire. *Child Development*, 72, 1394-1408.
- Rothbart, M. K., & Bates, J. E. (2006). Temperament. In W. Damon & R. M. Lerner (Series Eds.), & N. Eisenberg (Vol. Ed.), *Handbook of child psychology: Vol. 3. Social, emotional, and personality development* (6th ed., pp. 99-166). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons.
- Rudasill K. M., Gallagher, K. C., & White, J. M. (2010). Temperamental attention and activity, classroom emotional support, and academic achievement in third grade. *Journal of School Psychology*, 48, 113-134.
- Sukigara, M., Nakagawa, A., & Mizuno, R. (2015). Development of a Japanese Version of the Early Childhood Behavior Questionnaire (ECBQ) Using Cross-Sectional and Longitudinal Data. *SAGE Open*, 5, 1-12.
- Thomas, A., Chess, S., Birch, H. G., Hertzog, M. E., & Korn, S. (1963). *Behavioral individuality in early childhood*. New York: University Press.

附録

幼児期気質質問紙 36 項目日本語版 (CBQ-36-J) に採用した質問項目を気質次元毎に以下に示す (項目番号は CBQ-36-J のものであり, 番号の末尾の R は反転項目を意味する)。なお, 表左の気質下位尺度については, どの気質下位尺度にどの項目が属しているかを表している (気質下位尺度名の末尾の (R) は気質次元内の反転尺度を意味する)。

外向性・高潮性 (SUR)		否定的情動性 (NEA)	
	1		2
活動水準 (ACT)	14R	怒り・欲求不満 (ANG)	15
	27		28
	7	不快 (DIS)	4R
強い刺激への快 (HIP)	20		17
	30	反応の低減及びなだまりやすさ (FAL) (R)	5R
	8		18
衝動性 (IMP)	21R	恐れ (FEA)	6R
	31R		19
	13		12
内気さ (SHY) (R)	26	悲しさ (SAD)	25
	36		35R
エフォートフル・コントロール (EFC)			
	3R		
集中力 (ATF)	16		
	29R		
	9R		
抑制的制御 (INH)	22		
	32R		
	10R		
弱い刺激への快 (LIP)	23		
	33		
	11		
知覚的敏感性 (SEN)	24R		
	34R		

表 1 幼児期気質質問紙 (CBQ) における 15 つの気質下位尺度

活動水準 (ACT)	移動速度や範囲などの粗大運動活動の水準
強い刺激への快 (HIP)	強度・速度・複雑さ・新奇性・不調和の程度の高い刺激場面での快・喜び
衝動性 (IMP)	反応開始スピード
内気さ (SHY)	新奇或いは不確かな状況への緩慢な接近や接近抑制
怒り・欲求不満 (ANG)	実行していることを中断される, 或いは目的を妨害された時の否定的感情
不快 (DIS)	光・運動・音・きめの強度・速度・複雑さなどの刺激作用の質的感覚に関連した否定的感情
反応の低減及びびなだまりやすさ (FAL)	ディストレス・興奮・一般的覚醒のピークからの回復速度
恐れ (FEA)	痛みやディストレスを予期した時, 及び (又は) 潜在的脅威状況への不安・心配・緊張などの否定的感情
悲しさ (SAD)	被害・失望・対象喪失を被った時の否定的感情及び気分やエネルギーの低下
集中力 (ATF)	実行中のことへ集中力を維持する傾向
抑制的制御 (INH)	指示場面や新奇或いは不確かな場面で不適切な接近反応を抑制する能力や計画能力
弱い刺激への快 (LIP)	強度・速度・複雑さ・新奇性・不調和の程度の低い刺激場面での快・喜び
知覚的感性 (SEN)	外的環境のわずかな弱い刺激を感知する能力
接近 (APR)	楽しい活動を予期した時の興奮や肯定的期待
微笑と笑い (SMI)	刺激の強度・速度・複雑さ・不調和性の変化に対する肯定的感情反応

表2 CBQ-36-Jの探索的因子分析結果

Item No.	気質下位尺度	SUR	NEA	EFC
26	SHY(R)	-.82		
31	IMP	.77		
13	SHY(R)	-.77		
36	SHY(R)	-.76		
21	IMP	.62		
8	IMP	.61		
30	HIP	.56		
20	HIP	.49		
27	ACT	.47		
1	ACT	.47		
7	HIP	.44		
14	ACT	.38		
17	DIS		.68	
4	DIS		.59	
15	ANG		.52	
28	ANG		.51	
35	SAD		.45	
2	ANG		.43	
12	SAD		.43	
18	FAL(R)		-.42	
25	SAD		.41	
5	FAL(R)		-.36	
19	FEA		.36	
6	FEA		.34	
10	LIP			.56
23	LIP			.53
9	INH			.51
32	INH			.51
22	INH			.50
29	ATF			.49
3	ATF			.45
24	SEN			.43
33	LIP			.43
16	ATF			.40
34	SEN			.37
11	SEN			.35

注) SHYはSURにおける, FALはNEAにおける反転尺度であり, (R)で表記。

表3 CBQ-36-J・CBQ-VSFの信頼性係数

尺度	CBQ-36-J		CBQ-VSF		
	項目数	α	項目数	α	
SUR	12	.87	12	.76	(.75)
NEA	12	.76	12	.71	(.72)
EFC	12	.76	12	.74	(.74)

※CBQ-VSFの()の数値は, Putnam & Rothbart (2006) より転記。

表4 CBQ-36-Jにおける気質次元得点の平均と標準偏差

気質次元	男児						女児					
	3 years olds (N=57)		4 years olds (N=97)		5/6 years olds (N=114)		3 years olds (N=61)		4 years olds (N=92)		5/6 years olds (N=94)	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
SUR	4.41	1.00	4.49	0.99	4.53	1.07	4.13	1.10	4.19	1.00	4.20	1.02
NEA	4.06	0.85	4.11	0.80	4.13	0.81	4.00	0.83	4.08	0.87	4.05	0.86
EFC	5.26	0.77	5.31	0.68	5.35	0.69	5.41	0.69	5.64	0.66	5.61	0.65

表5.1 SURにおける性別 (対応なし) × 年齢 (対応なし) の二元配置分散分析表

Source	SS	df	MS	F	p	η_p^2
性別	15.362	1	15.62	14.91	.000	.018
年齢	1.75	2	0.87	0.83	.435	.002
性別×年齢	0.04	2	0.02	0.02	.982	.000
誤差	863.33	824	1.05			
全体	882.29	829				

表5.2 NEAにおける性別 (対応なし) × 年齢 (対応なし) の二元配置分散分析表

Source	SS	df	MS	F	p	η_p^2
性別	0.66	1	0.66	0.95	.331	.001
年齢	0.49	2	0.25	0.35	.703	.001
性別×年齢	0.14	2	0.07	0.10	.905	.000
誤差	557.2	824	0.70			
全体	578.64	829				

表5.3 EFCにおける性別 (対応なし) × 年齢 (対応なし) の二元配置分散分析表

Source	SS	df	MS	F	p	η_p^2
性別	14.27	1	14.27	31.53	.000	.037
年齢	4.59	2	2.29	5.07	.007	.012
性別×年齢	1.38	2	0.69	1.52	.219	.004
誤差	378.89	824	0.45			
全体	396.86	829				

表6 IBQ-R日本版, ECBQ日本版, CBQ日本語標準版を用いた月齢4か月から42か月における同気質次元間の相関

質問紙	月齢	気質次元	IBQ-R									ECBQ					
			SUR			NEA			EFC			SUR		NEA		EFC	
			4m	8m	12m	4m	8m	12m	4m	8m	12m	18m	24m	18m	24m	18m	24m
CBQ	42m	SUR	.23 **	.22 **	.20 **							.45 ***	.52 ***				
		NEA				.32 ***	.29 ***	.43 ***						.46 ***	.52 ***		
		EFC							.39 ***	.30 ***	.37 ***					.55 ***	.65 ***
CBQ-36-J	42m	SUR	.24 **	.27 ***	.29 ***							.44 ***	.51 ***				
		NEA				.18 *	.22 **	.33 ***						.35 ***	.39 ***		
		EFC							.37 ***	.26 **	.30 ***					.54 ***	.66 ***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$.